

第十三回国際神道文化研究会

## 西洋作家の神道観

——日本人のアイデンティティーを求めて——

平成二十五年二月九日 於・明治神宮参集殿

## 趣 旨

開国、明治維新をとおして世界に触れた日本人が、西洋文化に目を見張る一方、わが国を訪れた西洋の知識人や作家は、「不可思議な国、日本」に強い関心を寄せた。

本シンポジウムでは、平川祐東京大学名誉教授が上梓した、フランス語による論文集『西洋作家の神道観——日本人のアイデンティティを求めて——』（パリ ラルマタン社刊）、そのタイトルを議論の主題に掲げ、ラフカディオ・ハーンやポール・クローデルら西洋作家が見出した、わが国の伝統、文化、そしてその根底に潜む神道観についてご講演頂いた。また、神道および日欧文化交流史の専門家に、ご発題頂き、ハーンらを通して立ち現れてきた「神道」と、その本質について考察する機会となった。

基調講演 「西洋作家の神道観——日本人のアイデンティティを求めて——」

コメント① 「神道の過去・現在・未来——神道学の視点から——」

皇學館大学社会福祉学部教授

櫻井治男

コメント② 「クローデルと日本——日仏文化交流史の視点から——」

立命館大学国際関係学部教授

ミッシェル・ワッセルマン

コーディネーター

国際日本文化研究センター教授

稲賀繁美

## 討 議

稲賀 それでは、これから討論を始めたいと思います。国際日本文化研究センターの稲賀繁美と申します。宜しくお願ひ致します。平川先生、それから櫻井先生、ワッセルマン先生、どうもありがとうございます。私は進役ということですので、ここで少し議論の種となりそうな話を出しておきたいと思います。

宮崎駿さんの「となりのトトロ」。おそらくご来場いただいている殆んどの方がご存知の映画だと思いますが、たとえばこの「トトロ」を外国の人に見せて「これは何でしょう」といったとき通用するかどうか。皆さん、どう思われますか。トトロという存在が、たとえばカトリック国であればどこであれ理解できるのかどうか。「理解できないんじゃないか」と思われている人も多いのではないのでしょうか。

この点について私のささやかな経験を申しますと、以前、スペインのサラマンカ大学を訪ねました。この大学は中世ヨーロッパで一番古い大学三校のうちの一つでございます。ちなみにサラマンカ大聖堂のオルガンは岐阜県の技師の方が修理をしておられ、日本とも密接なつながりがある大学

です。そこで、たまたま「トトロ」についてふれる機会がありました。学生に尋ねてみたんです。学生にトトロを見せて、「これわかる？」と。すると彼らはすぐに反応しまして、「森の精 *espíritu del bosque* だ」と答えたんです。それから、映画の中に出てくる村外れのところ、お地藏さんがいるシーンがありますよね。「あれは何？」と聞くと、「あれは結界だ」と。つまり、そこでフロンティアができていて、聖と俗が分かれている、そういう場所だと、彼らにも、ぴんとくるわけですね。外国の人も、いわゆるスピリチュアルなものについて理解できる。

そこでクロードルの発言に戻るわけですが、彼は演劇とお能を比較して「演劇では何かが起こる。お能では何者かがやってくる」という言葉をのこしました。ここで私が気になるのは、クロードルが指している「何者か」の存在に、果たして死者の存在、つまり「先祖」の存在というのは含まれているのかということです。お能における「やってくる何者か」は、死者であることが多い。カトリックの場合、先祖は天国に行ってしまうわけですからこの世にはいない。スピリットといった存在に理解があったとしても、クロードルには「やってくる存在」というのが、はたして「死者」、「先祖」だという理解があったのかどうか。会場の皆さんからすれば、死者や祖先の霊を理解するなんて「そん

なの、だってあたりまえでしょう」と受け取っていらつしやると思うのですが、こうしてちよつと細かく考えてみると、「実はどうなんだろう」と。そういう問題がたくさんある。その辺りから議論を深めてみたい。

もうひとつ、先ほど「日本人のアイデンティティー」「日本文化の骨組み」という言葉が出てきました。われわれの生活の根底の部分にあつて、普段は見えないんだけど、外なるものを取り去った先に立ち現れてくるような存在、それが「神道」だ、という捉え方は確かにあります。ですが、私はそれに関して少し疑問に感じています。神道の本質というのは、例えば外来の宗教要素などを削ぎ落とした、その底に見えてくるようなものなのか。私はむしろ、神道というのは、選択的吸収と同化によって形作られているのではないかとも思うのです。

また、これまでのお話では、「お化け」やスピリチュアルに感じられる出来事があると即、それは「神道」だ、というところにも議論が進んでいたように思います。こういった神道の捉え方について、もう少し深めたお話を伺いたいと思います。先生方がかでしょうか。

平川 それでは最初にお化けの話から。怪談といいますか、お化けの話はやはり日本とか中国が非常に面白いんですね。

信仰は残っていた。それでは、日本でも、仏教が入ってきても前の信仰は残っているだろうと考えるわけです。それでお盆とか見ましても、「日本人というのはこういうふうにして来世のことを考えているんだな」と。アイルランドでも実はお盆と同じような風習があったものですから、そういうことはすぐに理解できました。ハーンは盆踊りについて書いていますが、その記述が非常に見事なんです。

ハーンは松江で、柳田國男の同級生の家に泊まっていた。だから、柳田はラファディオ・ハーンを一生懸命読んだ。そして、松江に行つて非常にハーンを讀めた講演をしております。日本の民俗学は柳田國男が始めたというけれども、本当はその先にハーンがあるんですね。高等学校の教科書などで、柳田國男の盆踊りのことを書いた文章をお読みだろうと思いますが、あれはラファディオ・ハーンの山陰地方での研究に刺激を受けて書いたわけです。それはきわめてロマンティックで、実際の現地の解釈とは違う解釈をしている。ですから、柳田はかなりハーンから影響も受けたし、競争心もないわけではないでしょう。

稲賀 ありがとうございます。柳田の「清光館哀史」は八雲の記述にそっくりですね。ワッセルマン先生、いかがでしょうか。

戦後はなんでお化けの話がつまらなくなるかというと、ホラーものになって、非常にサイエンティフィックになる。そうすると、情感がわかないんです。

一 神教の神話では天地創造、「クリエーション」ですね。ところが日本では、『古事記』の最初を見るとわかりますが、葦が生える。日本で梅雨の時期になると、じめじめと壁が湿気つてきて何か出てきますね。日本はクリエーションじゃなくて、「ジェネレーション」なんです。八百万のたくさんさんの神様がいますから、お化けがその先に出てきても不思議ではない。西洋でキリスト教の非常に厳格な国では、フェアリーということも言つてはいけなかったんです。超越的なものはゴッドだけで、フェアリーのような存在を認めなかった。そういう点、日本はお化けについては非常に豊かな世界観の国だといえるでしょう。

ラファディオ・ハーンという人は家庭が崩壊したことで非常に精神的に悩んで、キリスト教の信仰も失つてしまいました。キリスト教の信仰を失うと、西洋ではすぐ無宗教だとかいいますが、本人は非常に宗教的な人で、来世のこと、別れた母親のこと、あの世のことが気になってたまらなかった。そういう人だから、マルティニーク島にいくと、黒人奴隷の子孫たちもつ、なにか「霊的なもの」に非常に引かれている。カトリックが入っても、昔の

ワッセルマン もうすでに申し上げた通り、クロードルと神道との関係は難しい問題だと思っています。まずクロードルはほとんど神道という言葉を使つていません。たとえ一番神道の精神に近い講演会、日光で行われた「日本のこころを訪れる眼」でさえ、彼は神道という言葉は一切使っておりません。健脚家であり、自然の中を歩く事が大好きで、日本にいる間に出来る限りしばしば中禅寺湖のほとりにあるフランス大使館の別荘に滞在したクロードルは、大自然の神秘や「土地の霊」に対して何か感じていたに違いありません。日本では、「超自然的なもの」は自然以外のなものでもありません」とこの熱心なカトリック信者でさえ認めざるを得ませんでした。なお、今日のテーマとは直接関係がないかもしれませんが、能の愛好家としても、当時の歌舞伎のスターたちのために手がけられた「女と影」の戯曲作家としても、クロードルは日本の霊の世界に憧れを持っていたに違いありません。クロードルの心の中に、「日本」の精神性がありました。

櫻井 逆に言えば、クロードルは日本の伝承や自然について話すことで、「神道」という言葉を使わずに「神道」を語っていたということですね。では、神道という言葉を使

わず、ラフカディオ・ハーンのようにカミ、あるいはホトケというような言葉、あるいはそういうものを指し示す寺とか宮とか、そういった言葉を使っていたのでしょうか。

平川 クローデルは神道という言葉は使ってませんが、カミの国ということは言っているんです。ローマ字でKAMIと書いて。十九世紀末の中国と日本を比べますと、両国を知っている人は日本が好きになってしまおう。では両国の違いは何か。中国になくて日本にあるものは何かというと、それは神道なんですね。だから、そちらのほうに引かれる。ワッセルマン先生がお話しになったように、クローデルは仏教が嫌いでした。だから、特に日本の中にあるもの、それから土地の霊に引かれているんです。

クローデルが生まれた土地というのは岩石が嶮々としてお姉さんが彫刻家になったのがわかるような土地なんですね。映画『カミーユ・クローデル』の最初のところに、その場所が出てきます。こういうところに生まれていると、土地に霊があるという感じが強くなるんだろうと思います。日本に来て、「大使だから外交辞礼で日本のことをよく言った」という見方もできると思いますが、大使として本国に送った報告書には、アメリカやブラジルから送ったものは貿易関係とかそういったものが大部分だったのに対して

いたんです。ただ一元的だけではない、多様性をもっている。クローデルが日本の神々の世界を見たとき、彼の背景にあるキリスト教の「神の概念」だけじゃなくて、そういう多元的なものを持っているなかで発言したこともあるのではないのか。そのようにも考えるのですが。

平川 クローデルは富士山なんかも素晴らしいと感じています。だけど、富士山というのは結局、キリスト教の神を語るための祭壇のようなものだ。そういうふうには、「日本の自然」と「超自然的なもの」は相対立するものではないというカトリック側の立場で、神道を位置づけているわけです。

櫻井 ただ、先ほどから出ておりますハーンにしても、たぶんこの松江などではごくごく普通の自然というものに対しての畏敬をもっていた。しかし、それは畏敬しつつ、また自分にとって必要なものとして向き合っているというように感じるように思います。そこで「超」という言葉をどうとらえるかという気はたしかにするんです。

稲賀 超越の「超」という言葉をどう扱えばいいかという問題が出てまいりました。その問題と、本日のテーマであ

し、日本に関しては実に文化についての言及が多い。クローデル大使の日本報告は『孤独な帝国』という題で翻訳が出ておりますが、それに目を通すと本当に日本が好きだったことがうかがえます。それから、周りにいた日本人がよかったんですね。当時の日本人は戦後の日本人と違って、かなり自信に満ち溢れていたんだろうと思います。大和魂などと言ったわけです。

芳賀徹氏の訳した文章「日本人の心を訪れる眼」を先ほどワッセルマン先生がお読みになりましたが、私がまだ万年大学院生だった頃、ジャン・ジャック・オリガスと芳賀君の三人で、こんな話をしました。「フランス人の作家でだれが日本のことをいちばんよくわかってるだろうか」。ロティだろうか、ファレルだろうか。いや、クローデルだと。いまでもクローデルの日本観は素晴らしいものだと私は確信しております。

櫻井 せっかく専門の先生がいらっしゃるということで、コメンテーターという立場ですが質問させていただいてよろしいでしょうか。日本というのは本当にいろいろな神々がいる。対して、カトリックの国にまいますと、聖人や聖母信仰がありますが、こうしたキリスト教の多様な信仰についてどのようにとらえていったらいいのかなと思って

る「西洋作家の神道観」ですね。外から来た人が神道をどのように見たかということについて、ここから掘り下げていきたいと思います。

「超」という言葉の扱いは学問的には困ってしまうわけですが、ハーンはそういう議論に入りこまずに、うまく自分の目に見えたもの、自分の心に感じられたものを文学作品として紡ぎ出した。ただし、それはあくまでも英語で書かれた、日本語とは異質の媒体に最初から翻訳されたものですね。日本に来てからは妻の節子さんから口で話してもらったことを自分の心の中、頭の中で咀嚼して、それを英語にして綴っていた。そして、きょうの平川先生のお話にありましたように、これは日本に来て初めて試みたことではなかった。マルティニークにおいて、土地の人たちの中に交わり、そこで耳から聞いたものをどうやって文章にしていくなか。その方法として、文字にはされていなかったクレオールという言葉をトランスクリプションする、ローマ字に落とすというのが最初の仕事だったわけです。と同時に、それを長く残るかたちにして広めていった。その延長上に日本での営みがあったということだったと思います。先ほど触れましたお能というのは、多くの場合は不幸にして死んでしまった人の魂が到来する劇です。そのお能に例えると、舞台の上やってきた死者の魂を、ハーンは横

で見ている。つまり、ハーンは「怪談」の中で、いつてもればお能でいうところの「ワキ」の役割を、彼自身が演じているといえます。具体的にいいますと、お坊さんが行脚していると、旅先で不思議な人物と出会う。話を聞いてみると、会った人というのが亡霊であったと。その「諸国一見の僧」に当たる立場を、ハーン自身が演じているといえると思うのです。そうすると、ワキ役としてのハーンという人物は、いったい何者なのか。そして、クロードという人は外交官として日本に来て、自分の見たものを伝えようとした。われわれだったら言葉にする必要のないものを言葉にし、それを外の世界に伝えていくという仕事をやってくれた。そういう意味があるのではないか。神道について我々は口にしますけれども、それを外の世界につないでいつてくれた人の役割というのも、すごく大切なのではないかと思います。櫻井先生のお話に、減法としての神道、そして加法としての神道という内容がございました。「減らす」ほうとしまして、今度は「結び」ということも大きな役割を担っている。私は実はこの二人の作家は「結ぶ」ということにおいて大きな役割を果たした人ではないかなと思う

を海外の方々と話し合うことで、違う点、あるいは共通点を見いだし、またさらに発信をしていく。そういう状況を今後は神道からも出していく必要があると思っています。また、海外の視点からもう一度読み直すことで発見できる可能性はあるだろうという楽しみ、あるいは期待を感じております。

稲賀 ありがとうございます。それでは時間も近づいて参りましたので、このあたりでまとめさせていただきますたいと思います。

櫻井先生がアニミズム、プレ・アニミズムというお話をなさったあとで「マナ」という言葉をお使いになりました。このマナというのは、ニュージーランドの先住民マオリの言葉ですけれども、「もののけ」の「もの」とマナは実は考え方としてはかなり近い。それはひょっとすると、太平洋圏に広く広がっている、そういう存在に対するわれわれの接し方なのかもしれない。「もの」と「こころ」とが合わさったところに「こと」、出来事が発生する。これは南方熊楠が言った言葉ですけれども、そういう世界観というのが神道のひとつの側面として出てくるような気がします。

本日はここ明治神宮で講演させていただいておりますが、

のですが、その辺りについてはいかがでしょうか。

櫻井 いまおっしゃったように、日本の文化や日本のもっている多様な価値を外の世界に結んでいく、そして、外からの言葉によって、逆に私どもは理解を深めることができる。ハーンとクロードが遺したことに、たしかにそういった側面をもっていると思います。

神道における「はらえ」や「きよめ」、積み重なった罪や汚れを除くという概念、また「結び」という概念ですね。ただし神道では「結ぶ」よりも「産霊<sup>うぶたま</sup>」、すなわち「生み出される力」という意味合いの方を重視しています。はらい、きよめることによってもう一度、新たな出発の力というものを獲得する。これは、今後の神道の様々な役割として見ていける場所ではないでしょうか。また、平川先生のお話に出てきました「神さぶ」ということ。私は、あれは素晴らしいことだと思っているんです。新しいものに積み重なっていく古さの表現にも繋がる。そういう「もの」への意識、そして出発点に立とうとするような力。そういうものが表現できたら、おそらく神道が、海外の人の視点からも見えてくるようになるのだらうと思います。

残念なことに私どもは、これまで自分たちのことに対する発信が得意ではなかった部分がございます。学んだこと

明治天皇がたくさんの和歌をおつくりになったことは皆さんもご承知のとおりです。ここで、きょう神宮の杜の中で目にしました御製をご紹介します。

よきをとりあしきをすてて外国におとらぬくとなすよしもがな

よいところを取り、悪いところを捨てて、外国に決して劣らない国にする。そういう誓いを述べていらつしやいます。私は、選択的吸収と同化の軌跡が、結果的に神道と呼ばれることになったものの一端だと考えております。この御製はまさに「はらえ」と「きよめ」の除法の精神を表しているといえるでしょう。

それではもう一つ、「結び」の精神を示す御製を引用したいと思います。

わが園にしげりあひけり外国の草木の苗もおほしたつれば

気候風土の異なった外国産の草木の苗も、栽培の方法を得て生育してあげれば、我が国の苑にも立派に繁茂するものであることよ、との感慨を示されています。外来の帰化

植物の生育する姿に神ながらの道のありかたが託された、つまり、外から入ったものも上手くここで育てていけば、私のこの国にも転生を遂げて、新たに生まれ変わり新たな生命を得ていく。つまりリジェネレートしていく。そういう国にしていきたいものだと思おつしやっているのだと思います。

先ほど平川先生が、ヨーロッパの美学ないし神学はつくりだす、クリエーションである、それに対し、アジアではモンスーンのようなジェネレーション、つまりわき出てくるといふ言葉で表現することが適切ではないかというお話をなさいました。そして櫻井先生が「はらい」「きよめ」、そして「結び」の力でもってまた次を生み出す営みについて説かれました。この生み出す力、新たな生命を得る力、世代を越えて継承される生成の絆、これは英語だと「リジェネレーション」ですね。伝承の再生と転生のなかに育まれてゆく「産霊<sup>ひすび</sup>」の力。リジェネレートしていく力。その働き方のことをわれわれは「神道」と呼んでいるのかもしれない。

そしてこの「結び」の精神。外から到来する異形にも開かれ、その霊の異質性を尊重しつつも、それを和合させる広やかな寛容の知恵。これこそが、ハーンら外国人作家の見いだした「神ながらの道」だったのではないのでしょうか。

「混血のクレオール」とも呼ぶべきハーンや、日本を愛し日本文化の根源を理解しようとしたクロードルは、こうした神道の姿を具現し、内と外を「結び」存在となつたわけです。ハーンやクロードルが表現した神道観や、日本の美しさを世界に発信した「産霊<sup>ひすび</sup>」の姿勢は、今日の私共も学ばなければならぬ課題であると感じています。

それでは定刻となりましたので、本日のシンポジウムを終わりにしたいと思います。皆様、最後までありがとうございます。

執筆者・講演者一覧（掲載順）

平川 祐弘 東京大学名誉教授

櫻井 治男 皇學館大学社会福祉学部教授

ミッシェル・ワッセルマン 立命館大学国際関係学部教授

稲賀 繁美 国際日本文化研究センター教授

小平 美香 学習院大学講師

打越 孝明 明治神宮国際神道文化研究所主任研究員

行木 瑛子 ロンドン大学SOAS言語学科博士課程・明治神宮

日本研究PEO奨学生

松井 嘉和 大阪国際大学国際コミュニケーション学部教授

エヴァ・パワシユールトコフスカ ワルシャワ大学東洋学部日本

学科教授

稲葉 稔 明治神宮国際神道文化研究所研究員

ルイーズ・ニコラ パリ・カトリック大学経営修士課程

神園かみのぞの  
〔第十号〕

平成二十五年十一月三日発行

編集兼  
発行者

明治神宮国際神道文化研究所

〒151-8557

東京都渋谷区代々木神園町一番一号  
電話 〇三（三三七九）九三三八  
FAX 〇三（三三七九）九三七四

制作 錦 正 社

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町五四四一六  
電話 〇三（五二六二）二八九一  
FAX 〇三（五二六二）二八九二